**☆身心変容論としてのベルクソン〈神秘主義〉論：「社会系」神秘主義と「異界系」神秘主義の交錯・融合としての身体機械系神秘主義　　　　　　　　　（2013/06/13：鶴岡賀雄）**

略号：　HB：アンリ・ベルクソン(1959-1941)；　DI：『意識の直接所与についての試論＝時間と自由』(1888)；　MM『物質と記憶』(1896)；　EC：『創造的進化』(1907)；　DS：『道徳と宗教の二源泉』(1932)

**主旨：**「身心変容」の理論としてHBの哲学を読む。（DSの現代的「読み筋」を見つけたい。）

**１．HB個人の身心変容**

・スポーツする身体（青年）（乗馬の実感）→リウマチスで逼塞する身体（老年）

・個人的信仰の獲得の問題（キリスト教～カトリシズムに帰依しつつユダヤ人として死ぬ）

（Cf.中村弓子『心身の合一―ベルクソン哲学からキリスト教へ』2009)

**２．HB哲学の性格**：全体学（⇔科学：部分学：心理学、生理学、生物学、社会学、神学、）

　　→HBの諸著で扱われている諸問題の相互関係が問題となる。

◯DI～MMにおける身心論

・物質～記憶の連続態としての身心

・「精神」の物質（としての知覚＝身体）からの独立

・「変容」は、問われない。持続としての自由論（DI）

・その身心関係論は近年の脳神経科学からの宗教論にも寄与するところがあるはず。

◯ECにおける身心

・生命の「進化」としての変容：「種」の水準での変容

・進化：「人類」にまで到る「価値」の創造～増大：「意識（心）」の出現；「自由」の増大。（「目的」は不定？）

**３．DSでHBは何を言ってるのか？　何を言いたいのか？**

◯詰め込みすぎのDS：宗教と道徳と社会と政治と歴史を一緒に論ずる。さまざまな問題地平が、HB特有の叙述法によって丸め込まれている。論旨は一貫しているにしても、それをいったんは腑分けして理解する必要がある。

・構成：

第一章「道徳的責務」：道徳論。閉じた道徳～社会／開いた道徳～社会；道徳的英雄としての神秘家

第二章「静的宗教」：未開社会宗教論

第三章「開いた宗教」：神秘主義論

第四章「最後の諸考察――機械系と神秘系」：「現実問題」として考える。

**・第一主題：**道徳～宗教論（と不可分の社会論）であって、神論ではない。神（ないし異界）を主題とするのではなく、（神～異界との関わりにおける）人間社会のあり方が主論題。これを、「社会系神秘主義と異界系神秘主義の交錯・融合としての身体～機械系神秘主義」論として語る。

・第二の主題：危機的時代状況の中で、「人類」に向けて訴える！（第四章）

（「agitationの本を書きたい」cf. Lettre à J.Lotte; J.Chevalier, *Entretiens avec Bergson,* 1959）

・第三の（かくれ）主題：HB自身にとっての探求の書。カトリシズムへのさらなる接近の前提（「哲学」としての限界で止まる、止める）。

◯鍵概念としての「神秘主義le mysticisme」：とくに定義されず、当時の宗教学で流行していた（＝「構築」された、したがって輪郭の定かでない）「神秘主義」理解に依拠する。（W.James, E.Underhill, F.von Hügel, P.Janet, R.Rolland, H.Delacroix, M.Montmorant, E.Seillers, )

　誰が神秘家か：パウロ、フランチェスコ、ジャンヌ・ダルク（！）、シエナのカタリナ、アビラのテレジア、・・・；実質的には「イエス」（神秘家の範型としての「超神秘家surmystique」）

（神秘主義理論史からしての違和感、異質観は拭えない。⇒後述）

◯根本理論枠としての「二源泉（且つ一根源）」

道徳（内感の質的区別）；閉じた／開いた：押される／惹かれる：社会的圧力／英雄からの牽引：非人格的・機械的／人格的・情動的

宗教；静的／動的：（デュルケム描く）トーテミズム／（カトリック的）神秘主義（ともに、sérénité,confiance à la vieを与える）

社会；閉じた／開いた：部族～国家／未来人類（超人類）共同体

（第一次大戦以後の「政治的ベルクソン」の経験　Cf.Ph. Soulez, *Bergson politique*, 1989)

形而上学；エラン・ヴィタール／エラン・ダム－ル（ともに、「生」である）

◯方法：「経験主義」：「二分法と統一」(cf. Frédérick Worms, *Bergson ou les deux sources de la vie*, 2004）

「神秘家」（第三章）／「未開人」（第二章）を；

　外から見る「実証主義」：何を信じてるかではなく何をやってる・行動してるか。初期宗教人類学。

　内から自分で感ずる「実感主義」：押される／惹かれる；「蟻の身になる」「未開人になる」（ﾚｳﾞｨ=ｽﾄﾛｰｽの評価…）

が、「神秘家には・・なれない？」。自らが神秘体験するのではない。信者・フォロワーの神秘主義であって、神秘家の内感の探求ではない。（*これは「神秘主義」概念の本質と思われる。*）神秘家に憧れ惹かれる、（「自らの内に反響echoを感じる」）経験の探求。神秘家は、ひとつの「人格」でなければならない。達人ではなく、「批判的精神」でもない、「中間者」の位置；二つの力の狭間で、開いていく～開かれていく動きのありさまをとらえようとする。

・直観可能性の根拠：「知性の縁暈」；本能の名残、「仮構機能」、神話的表象、芸術的創造力、

○神秘家自身（の身心変容）の記述；成功しているのか？　機械の比喩はなぜか。

・天才génie＝英雄héro：突然「変異mutant」、「超人sur-homme」「人間以上plus qu’homme」、各自が一つの「種」としての神秘家

・MMでの、記憶の円錐における夢～ヴィジョンとの接続は考えない。Cf.「夢」論文（ES所収）。

・心霊科学の成果には肯定的だが、それを神秘家の経験とは接合しない。あくまで、一般人にとっての意義。Cf. DS第四章末尾。

（総じてDSには、「異界系」の宗教論は希薄ないし最小限。死者と生者を含む社会を考えているか？(津城)）

○「神」論；生の根源／愛の根源（Cf.EC：「そこから生の火花が吹き上がってくる中心」）

・「哲学者の神」徹底批判；「人格神」主義（静的宗教から、仮構機能から、présence efficaceから）

・「愛である神」（訳183）

・「超越神」にはなりきらない。（内在の哲学としてのベルクソニスム）

◯目標：人類l’hunanitéの変容（第四章「神秘系と機械系」）

・神秘家に惹かれる人々の協働：「神々を作る機械としての宇宙の中で神々になる」

◯宗教進化論：神秘主義と実際の諸宗教との関係

・動的宗教の出現（人類の創造的進化）によって、静的宗教（の意味・意義）が変わる。

「実際を言えば、それら〔動的宗教出現以前の諸宗教〕を〔動的宗教を生む〕試行群へと、過去に作用を及ぼすかたちでrétroactivement、我々が変えるconvertissonsのである。」(229)

動的宗教の出現によって、歴史が変わる＝進む。（「回顧的錯視」の逆転？）

◯DSにおける身体

宇宙的身体（←MM）

行為する（＝生きる）身体。行動こそが実在。（行動を生まない観照・理論への徹底批判）

⇒行動とは何か。「愛」（の業）である。それは「歓喜」をもたらす。

◯（HB自身の）哲学的知性の位置づけ

・第二章と第三章の間に「学問的～哲学的知性」がある。この地点に、HB自身、また読者が立つ（ことが求められる）。彼らを「動かそうとする本」をHBは書きたかった。（が失敗。）

・哲学的直観と神秘主義的直観即行動が「協働」することによる、新たな形而上学＝異界探索の可能性；「哲学的知性」自体は変質変容しない？？（「哲学の終焉」を言わない。）

★なぜHBは、MM以来の記憶（精神）の深淵探査からの「異界」探索、また、ECでの「生の根源」からの神論（生即神；哲学者の神？）を突き詰めなかったのか。「社会的現実」こそが「道徳と宗教」の問題として大切だったからか。DS執筆の文脈。

彼の、現実社会への関心が、DSの行動主義的神秘主義理解を生んだ。しかしHBは初めから、行動～運動をこそ実在とする哲学者だった。そして身体とは行動する（＝生きる）者である限りの人間そのものであり、人間という種は共同体においてこそ生きる。人類の進歩＝進化とは共同性の「質」の変容である。（cf. A.

**４．HBの神秘主義概念（乃至批判的問いかけ）**

・実質的には、「根源への逸脱」[[1]](#footnote-1)を神秘主義と呼んでいる。

「逸脱」のモメントは、「閉じたもの（社会常識）」からの脱出＝（過激な）破壊として、つまり既存の停滞への否定の動きとして現れているはずである。しかしHBの哲学では、否定性は新たな肯定性の提示であり、否定性自体としては強調されない（Cf. EC4章）。（神秘主義の「暗夜」は一言触れられるに留まる。）その「反」知性主義は、「知性以上」の「情動」の肯定である。

しかし、肯定の語りだけで「開いていくouvirir, s’ouvrir」動勢を捉えきれるか。「開かれたものl’ouvert」の語りになってしまわないか。

・キリスト教神秘主義は宗教進化＝人類進化（神化）の「完成態」であるか？　その方向のみを、神秘家たちは指し示しているか？　神秘家たち相互の一致は「実証」されるか？（交会測量法は成立しているか？）　むしろ、神秘家たちの方向は多彩に炸裂しているのではないか？？

1. 「**神秘主義の再定義に向けて**半ば自然言語として長く用いられてきた「神秘主義」の語義は、いわゆる家族的類似を以て連関しつつ拡散している。が、この語で言われる事象に何らか共通点を捜すとすれば、それは、それぞれの時代・地域の宗教における主流の知からの逸脱、それも過激な逸脱というところに見いだしうるかもしれない。ただし正当・主流の知を外部から批判するのはなく、当の正統知が形成されてきた根源に、通常許容されている以上に強く、深く迫ろうとする欲求ゆえに、その尋常な限界を越え出てしまうような動向、いわば根源への逸脱である。であれば神秘主義は、何らか特定の実践や思想の体系であるよりも、各（宗教）伝統の根源的真理としてのを固定的な体制を構築して枠付け、定式化しようとする態度からの、不可避かつ不断の逸脱の動勢自体を特徴とする。このことはまた、神秘主義が元来「神秘的」という形容詞の名詞化であったという来歴を思い起こさせる。それは、常識化・定式化した世界理解をその根源に向けて逸脱するような思想や営為に対して、それに一定の魅力と理解不能性を感知する者が賦与する形容であろう。そしてそうした形容を喚起する現象がつねに生起するものならば、神秘主義という言葉は、なおも普遍的な使用価値を有するかもしれない。」『宗教学事典』2010 [↑](#footnote-ref-1)